

派遣される

イエスさまが神の国の到来を告げて回られたとき、それはお一人でなされる業ではありませんでした。神の子であり、さまざまなることを成し遂げる奇跡の力をお持ちでしたが、イエスさまは決して単独で神の国を告げ広めることをなさいませんでした。それどころか初めから、ご自分と一緒に働く協力者をお求めになりました。弟子と呼ばれる者たちです。このことに福音書記者ルカはとくに注意を払っているように思います。四人の漁師を弟子にするという記事がマルコ・マタイ・ルカにありますが、ルカのそれはペテロに焦点をあてた大変詳しいものとなっています。その他にも、行く先々で癒やされた者や、悪霊を追放して頂いた者たちの中からイエスさまに従う者たちが起こされたことを記します。7章最後に登場する「罪深い女を赦す」に続いて、8章冒頭に「婦人たち奉仕する」とイエス様の一行に付き従った婦人たちの記事を書いたのもルカの配慮です。こうして職業や性別を問わずに、イエス様と出会った者たちが交わりに生かされて新しい群れを形作ってゆく。そのさまをルカは丁寧に追っていくのです。それはたんにユダヤに留まらず、すべての国民を招くものとなる。そのような視点を、この福音書をローマ帝国の高官テオフィロに捧げたルカは持っていたに違いありません。その証拠に9章からはじまる「12人の派遣」、10章に入るとご自分が行くつもり町の町や村へ「72人を派遣する」と、イエスさまによる神の国を伝える伝道キャンペーンが展開されてゆきます。今日ご一緒に読みました72人を派遣する出来事はルカだけが記すものです。この箇所には伝道の心得が記されており、それはある程度、この後のキリスト教会の伝道にも受け継がれていったと考えられます。たとえばこの72人

を二人ずつペアにしたという教えは、ユダヤでは証言が真実であることの保証には二人以上の人数が必要であったこと。また旅行の安全面を考えでの配慮もあったでしょう。実際、使徒言行録をみますとパウロとバルナバ、ペテロとヨハネ、パウロとシラスなどペアを組んで地中海の伝道に送り出されていたことが記されています。もちろんソロでゆく場合もありました。

興味深いのは、この 72 人、36 ペアの働きは、イエスさまの行くつもりすべての町や村へ先に遣わされたということです。後から主ご自身が来られる。その先触れとして派遣されるのです。これはキリストに結ばれて生きているわたしたち一人ひとりも心構えとして弁えておきたいことです。主イエス・キリストの御名によって祈る者は主の代理人として遣わされ、あとから来る方を指し示すのです。4 節以下には、旅に持ってゆく具体的なものや、町や村に入る時の心得、現地についての振る舞い、そこで彼らがなすべきことが指示されています。この部分は時代の制約もあり、今でもこの通りに出来るかどうかは分かりません。しかし、半田教会でも伊勢湾台風あとに災害復興のボランティアとして穂積さんのお宅に泊まって活躍しておられた宣教団体がおられ、彼らの毎日の祈りから穂積さんご自身も影響を受けたということを聞いております。あの時、半田は阪神淡路や、東日本のような非常事態であったわけですが、キリストの使者たちを受け入れて彼らの働きをサポートするボランティアたちのベースキャンプになる働きをしていたのです。こういう働きも様々な災害が起きた際に、キリストの教会が果たす役割として重要なものです。話を戻しますが、時間も限られていますので今朝は、イエスさまが 72 人を任命して派遣されたときに仰られた最初の言葉に注目したいと思います。「収穫は多いが働き手は少ない。だから収穫のために働き人を送って

下さるように、収穫の主に願いなさい」という有名な言葉です。マタイによる福音書では12人を派遣する直前に、この言葉が置かれています。ルカは72人の派遣の記事の中にこの言葉を入れています。12人から72人へと増員された理由としても頷けるものです。ですが、この御言葉をどう理解したらよいでしょうか。まず抑えておきたいのは主語を間違えないことです。前後の文脈をたどれば、イエスさまが「任命し」、「派遣し」、「願いなさい」と命じ、「遣わす」のです。召されて遣わされるというこの道筋をとらえ損なうと、わたしが主人公となり、伝道は人間業となります。人間業でどこがいけないの、働くのは人間でしょうと切り返されそうですが、そこは違います。わたしたちキリスト者は、みな主に選ばれ、結ばれ、それぞれの使命へと任命されて送り出される。後詰めというか、うしろに真打ちのキリスト・イエスがおられます。どうも「派遣」という言葉が日本では2000年代以降、労働環境の変化にともなってマイナスイメージがついてしまった感じがあるのですが、こと伝道に関しては譲ることが出来ません。そうでないと偽預言者のように神の御心ではなく、自分の思い描くよいこと、理想や思想を語ることになります。ですから御言葉に忠実に、つまり聖書の告げる使信に対して聴き従う姿勢をもって働かなければなりません。派遣される責任を取って下さるのは、わたしたちを任命し、遣わされる主ご自身です。だから、必要なものは願いなさいとキリストははっきりと言われるのです。伝道とは必要なものを神さまに願うことなしに進むものではありません。まず祈りの業です。そして神さまは必要なものを必ず備えてくださいます。神の派遣には祝福が伴うのです。だから財布も袋も履物も持ってゆくなというのです。そこには必要を満たされる神さまの恵みのご支配への信頼が説かれているのです。こうして

派遣される者たちは、お金や持ち物の力によるのではなく神の恵みによって生かされる祝福の担い手、すなわち神の器となります。そのことはこの後のところでもはっきりと書かれていて、使者たちが告げる神の平和がその人がそれを受け入れればそこに留まり、そうでなければ帰ってくると記されます。遣わされ、宣べ伝えられたキリストの福音にどう応答するか、伝えられる福音の尊さゆえに使者をどのように扱うかという態度が救いに関わってくる。この意味で福音伝道は、終わりの日に起こされることの先取りでもあるのです。イエス・キリストが来られて、神の国、神さまのご支配はこのようなものであると伝えられ、そこに招かれ、神の御心を受け入れて生きることを人々に求められた。これは先に期末テストの問題を教師がやって来て教えてくれるようなものです。知らされた方はこれに備えて生きるかどうか。示された課題に御言葉と対話しながら向き合うか。それがわたしたちの完成に関わり、実際の終わりの時に問われるのです。ここは非常に象徴的だと思うのですが、イエスさまは「収穫は多いが働き手は少ない」と、伝道の業を収穫に譬えられました。収穫とは実りの季節の末に訪れるものです。刈り入れはその時に行われる。わたしが思わされていることは洗礼を受けてキリスト者になることはゴールではないということです。それは種蒔きなのです。キリストにつながり、成長を始めるスタート地点なのです。収穫は多いが、働き手は少ないというこの御言葉を、わたしたちが伝道をして教会員を増やすことと短絡的に考えてしまうと大切な点を見誤ります。イエスさまは収穫の時、その人の終わりにまなざしを向けておられるのです。神さまが良し、刈り入れだと仰られる時を待っておられるのです。わたしは教会暦の終末主日、これは適切にも収穫感謝日と呼ばれていますが、この日に毎年リビングウィルをお渡し

しています。わたしたちの終わりの日は隠されていて分かりませんが、収穫感謝日をそれぞれの終わりの日ととらえ、いずれ実りを携えて神の前に立つ日が来ることを覚え、顧みて、今の生き方を整えるよすがとするためです。洗礼は、主が望まれる実りへのスタートでありゴールではありません。収穫は多いが働き手は少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に関心なさい、というお言葉は、実りのために必要な一切を、主に祈り求めながら、互いに配慮しあい、愛し合いながら終わりの日、収穫の日に向かって生きるようにというわたしたちへの励ましであり、招きです。自力で実らせるものではありません。収穫の主がおられます。そこから離れず、教会に留まり続けて、御言葉に生かされることを通して、神の業がわたしたちのうちに実らされてゆくのです。それには時が必要ですが、信仰に始まり、信仰に至らせると言われるように、神の恵みがそのように働いて、わたしたちを持ち運んで下さるのです。その過程こそが信仰者として生きるということであり、わたしたちが遣わされているそれぞれの持場で、わたしたちを派遣して下さり、やがて来られるキリスト・イエスを指し示す尊い働きとされるのです。それがわたしの伝道です。わたしたちを召し、必要なものを備え、派遣される主イエス・キリストに信頼して、終わりまで主に仕えたく願います。

お祈りいたします。